

## 最も小さい者こそ

渡 辺 総 一

このたび「平和への祈り」と題し、関西学院でキリスト教美術の個展を開催していただき、心より感謝いたします。拙い絵ですが、皆様に見ていただかずことを喜んでおります。

この主題に沿った作品をこれまで描いた中から20点ほど選び、また今年描いた作品「子供たちをわたしのところに来させなさい」を加えました。それは、イエス様が子供たちを祝福されることは、平和への祈りにつながる教えを含んでいると思えたからです。ところが、実際にこの絵の制作上で明らかになりましたのは、わたし自身がイエス様の教えと正反対の考えに立っていたということでした。

マルコの福音書(10:13-16)によりますと、人々が子供たちをイエス様のところへ連れてきて祝福していただくとうとしますが、弟子たちはその人々を叱りました。イエス様はこれを見て憤り、弟子たちに言われました、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。だから子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と。そして子供たちを抱き上げて、手を置いて祝福されました。ルカ福音書では乳飲み子を連れてきたと記されてありますので、16世紀のクラナツハの描いた絵では、母親達が赤ちゃんを抱きかかえて、イエス様を囲んでおります。わたしも、母親と赤ちゃんや子供たちを祝福するイエス様の様子を、この2年ほどの間に小さい絵で2枚ほど描きました。そして今回は新たに弟子たちも入れた構図で描こうとしたのですが、絵の中心は従来どおりイエス様と母親と子供たちと考えました。人々を叱る弟子たちは、一人の弟子に代表させ、右端に寄せて描きました。母親と子供たちを排除しようとする弟子たちは、子供たちを取るに足らない者であるとし、これらの人々がイエス様近くに来ることは先生の働きの妨げになると考えたのかもかもしれません。

この絵を描こうとしたもう一つのきっかけは、アメリカ軍によるバグダットの空爆の映像を見たことでした。瓦礫の中から救い出された子供たちや老人、婦人たちが血を流して苦しんでおり、戦争はこのような小さい者たちが傷つくのだと知らされました。それで叱る弟子たちの言動を刺々しい形と色で表現しました。構図の上ではこれで一つのまとまりをつけようとしたのですが、何日かかって色の調和がうまく生かませんでした。4月から準備を始め8月半ばまでかかり、一応の仕上げといたしました。

一つ峠を越すことができたのは、絵の中心が、イエス様と子供たちよりもむしろイエス様と弟子たちの物語、いやそれどころかイエス様とわたし自身であることに気がついたからでした。弟子たちの考えは、わたしを含むこの世の一般的な考えを代表しているように見えました。しかし、イエス様の考えはそれに反対します。子供たちのような最も小さい者たちこそ、神の国にふさわしいのだ、と言われるのです。

絵の中ではイエス様の手と心は、子供たちを祝福していますが、それと同時に弟子たちに向かい強く論じておられるのです。神様は誤っているわたしを切り捨てずに、わたしを小さな者たちのようになり、また小さい者たちに仕えることを教えてくださっていることを覚え、感謝いたしました。

(画家)